

価値論の一基本問題

——抽象的人間労働の存在様式と価値概念——

頭 川 博

はしがき

商品の二要因たる使用価値と価値とを掘り下げて二重の形態の労働に分析することは、「私をはじめ批判的に指摘した」(『資本論』I、マルクス・エンゲルス全集版、五六ページ)とマルクスが自賛している通り、『資本論』が古典派経済学を乗り越えた「根本的に新しい要素」(一八六八年一月八日付エンゲルス宛手紙、『資本論書簡』2、国民文庫、一一二ページ)の一つをなすが、問題は何故にこの労働の二面的規定に資本主義的生産の「批判的把握の全秘密」(同上、一一三ページ)が潜むのかという点にある。一体、労働の二重性把握が「経済

学」の理解にとっての決定的な跳躍点」(『資本論』I、五六ページ)であるとはどういうことであろうか。単刀直入に言って、われわれは労働の二重性把握の理論的意義に関する従来の説明をすべて認めたうえでおそこに「経済学」の理解にとっての決定的な跳躍点」たる根本理由の理解に関して理論的盲点があったと思うのである。それは以下の理由からである。即ち、「商品の価値対象性は純粋に社会的である」(同上、六二ページ)ことは価値概念に関する周知の基本命題であるが、ここで一旦踏み留まって価値が自然素材を一分子も含まない純粋な社会的定在であるという命題の理論的含意について反省すると、それは必ずしも自明でないことに気付くのであ

る。というのは、価値の最も基本的な概念規定は抽象的人間労働の結晶ということであるから、価値の社会的定在たる所以は抽象的人間労働の独特の存在様式それ自体に求められねばならないはずであるが、しかし、この抽象的人間労働の特有な存在様式そのものが判然としないからである。

われわれの積極的見解を先取りしていえば、社会的定在としての価値の秘密が潜む抽象的人間労働の独特な存在様式の分析こそ第二節「商品に表わされる労働の二重性」の主題にほかならず、マルクスはここで抽象的人間労働の存在様式を千差万別の具体的諸労働の相互関係に見いだすことで価値が社会的定在をなす所以を根底的に論証したのである。それゆえ、資本主義的生産の体系的把握の根本的基礎たる価値概念把握の真髄は労働の二重性把握それ自体にあり、この意味で労働の二重性把握は「経済学」の理解にとっての決定的な跳躍点」をなすとわれわれは理解するのである。ところが、従来、一方で価値概念と労働の二重性との内在的関係の分析において決定的不十分であったのみならず、他方でマルクスの労働の二重性把握従ってまた価値概念把握に根本的に背反す

る抽象的人間労働Ⅱ超歴史的範疇説が根強く定着しており、われわれはここに価値概念と労働の二重性との一体性についての理論的盲点を見ざるをえないのである。

それゆえに、本稿の課題は、論理を段階的に積み上げて価値が社会的定在をなす所以を抽象的人間労働の独特の存在様式に見いだし、もって労働の二重性把握の根本的意義を確定することにある。これによって同時に超歴史的範疇説が根底的に批判されることになる。

一、労働の二重性把握の基本前提

先述の通り、本稿の基本課題は価値の社会的定在たる所以がその実体をなす抽象的人間労働の特定の存在様式にあることを明らかにすることで抽象的人間労働が商品生産に固有な特殊歴史的範疇であることを論証することにあるが、ある意味で論争的なこの問題は段階的な論理の積み上げによってのみ解決可能である。そして、抽象的人間労働Ⅱ超歴史的範疇説に関していえば、そこには種々の曲解が積み重なっており、ここからしても、さしあたり抽象的人間労働が歴史的範疇か否かを一応別として、具体的有用労働と抽象的人間労働との関係というこ

く基礎的な問題に照明を与えておくことが必要である。
本節の課題はそこにある。

具体的有用労働と抽象的人間労働との関係把握について通常支配的にみられる一つの理論的偏向は両者を単純に同一労働の対立的な二側面として区別するだけの理解である。つまり、この支配的見解によれば、二重的な労働は使用価値と価値とに別々に帰結するものとしてだけ機械的に把握され、同一労働の二側面としての両者の具体的関係については十分に意識されていないのである。

しかし、労働の二重性というからには二重の形態にある労働は立体的な関連にたつはずである。でなければ、二重の規定を受け取る同一労働の「同一」は空語に帰すからである。事実、マルクスは二重的形態の労働を単に対立的に峻別するだけでなく両者の構造連関を明確に付けているのであり、マルクスにとって労働の二重性とは先ずもって両者の構造連関それ自体にはかならないのである。それは一言にしていえば、抽象的人間労働は具体的有用労働を抽象的な形態に還元したものだということであり、前者と後者とは単に同一労働の対立的な二面であるのみならず、同一労働そのものが実に具体的有用労働

にはかならないということである。以下の論述はマルクスによって明言された二重的労働の立体的関連である。

「リカードの場合には、使用価値に表わされるかぎりでの労働と交換価値に表わされるかぎりでの労働との混同が一貫して見られる。もちろん、労働のあとのほうの形態は、ただ、前のほうの労働を抽象的な形態で把握したものにすぎない。」(『剰余価値学説史』Ⅲ、マルクス・エンゲルス全集版、一三六ページ)

「紡績が綿花に価値を付加するのは、それが社会的な同等な労働一般に、労働のこの抽象的な形態に還元されるかぎりにおいてであ(る)。」(『経済学批判』(一八六一—一八六三年草稿)Ⅰ、マルクス資本論草稿集④、六九ページ)

「交換価値を創造するかぎりでの労働は、ただ、労働の規定された社会的形態・一定の社会的定式(Formel)に還元された現実的労働にすぎ(ない)。」(同上、七〇ページ)

つまり、ここでは、「交換価値に表わされるかぎりでの労働」＝抽象的人間労働が「使用価値に表わされるかぎりでの労働」を「抽象的な形態で把握したもの」であ

ること、具体的有用労働こそが「現実的労働」であることが明示されているのであるが、このことは二重的労働が同一労働の二面であることの反省によって生じる唯一の論理的帰結である。しかし、マルクスが二重的形態にある労働の立体的関連を真正面から分析したのは当の第二節「商品に表わされる労働の二重性」においてにはならない。即ち、マルクスはここで先ず特定の生産形態にかかわらずある特殊な使用価値を生産するには「特殊な合目的な生産活動」(『資本論』I、五七ページ)が必要だとしてこの「特殊な合目的な生産活動」を具体的に有用労働と規定し、そのうえで、商品生産の基礎上ではある特殊な使用価値が同時に価値でもある限り価値に表わされる労働は使用価値に表わされる具体的有用労働の具体的な有用形態を捨象したものにはかならず、この意味で価値に表わされる労働は文字通り抽象的¹⁾人間労働だというのである。

「生産活動の規定性、従ってまた労働の有用的性格を無視するとすれば、労働に残るものは、それが人間の労働力の支出であるということである。」(同上、五八ページ)

「価値としての上着やリンネルではそれらの使用価値の相違は捨象されているように、これらの価値に表わされている労働でもそれらの有用形態の相違、裁縫と織布との相違は捨象されているのである。」(同上、五九ページ)

「裁縫や織布が上着価値やリンネル価値の実体であるのは、ただ、裁縫や織布の特殊な質が捨象されて両者が同じ質を、人間労働という質をもっているかぎりでのことである。」(同上、六〇ページ)

従って、ここでの一つの強調点は第一節「商品の二つの要因」で析出した使用価値と価値とを単に労働の二重的形態に帰着せしめることにあるのではなく、価値実体をなす抽象的人間労働つまり「生理学的意味での人間の労働力の支出」(同上、六一ページ)が使用価値に結実する具体的有用労働それ自体の抽象のうえにのみ成り立つ両者の立体的関係の明確化にある。²⁾そして、二重的な労働のこの立体的関係は裏を返せば使用価値に表わされる具体的有用労働が現実の实在的労働そのものだということであるが、このことも少しく考察を加えれば理の当然であることがわかる。即ち、人間が労働する場合には

無目的に何の外的素材を使わずに労働力を支出することができず、生産的活動はその目的・対象・手段などによって規定されているのである。従って、その際、生産的活動の主体である人間の労働力支出は、特定の、合目的な肉体的な諸器官の発揮、筋肉・手足・脳などの特定の機能作用から成り立っており、人間労働力の支出そのものが根元から生産的活動の目的・対象・手段などによって規定し尽くされているのである。それゆえ、実在的労働は具体的有用労働の形態以外にありえないのである。次のマルクスの論述はこのことの強調とみるべきである。

「単なる人間労働、人間労働力の支出は、どのようにも規定されることはできるが、それ自体としては無規定である。それは、ただ、人間労働力が特定の形態において支出されるときにはじめて、特定の労働として実現され、対象化されることができるのである。なぜならば、ただ特定の労働にたいしてのみ、自然素材は、すなわち労働がそれにおいて対象化される外的な物質は、相対するのだからである。」(『資本論第一巻初版』、国民文庫、一八ページ、傍点—マルクス)

ここでは、客体的な労働条件の下でのみ合目的な労働

働力の発揮が可能であるから、労働力は「特定の形態において」のみ支出されうることが言われているのである。それだから、この点から論理を一步進めていえることは、使用価値に結実する具体的有用労働は「使用価値の生産 (Production de valeurs d'usage)」(Le Capital, Paris, Éditions Maurice Lachatre et C^{ie}, 1872-75, p. 66) の過程たる労働過程論で述べられる、「人間は…自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手を動かす」(『資本論』I、一九二ページ) まさにその「合目的な活動」(同上、一九三ページ) と同義であり、この理解によって商品の二要因が関係付けられた二重的な労働は労働過程と価値形成過程とに論理的に無理なく対応させられ論理的な整合性をもつことになるのである。使用価値をもたらす具体的有用労働が実在的労働の唯一の姿態、特定の生産的活動そのものであることはマルクス自身の論述からも裏付けられることである。例えば、次の叙述はその端的な例証である。

「どの使用価値にも、一定の合目的な生産活動または有用労働が含まれている。」(同上、五七ページ)

「労働者はそれぞれのようにして労働時間を、したがってまた価値をつけ加えるのか？ いつでもただ彼の特有な生産的労働様式の形態でそうするだけである。」

(同上、二一四ページ、傍点―頭川)

第一章第二節で登場する第一の引用文のうち「一定の合目的な生産活動」とは第五章第一節「労働過程」で生産手段と並ぶ「労働過程の単純な諸契機」(同上、一九三ページ)の一つとして挙げられる「合目的な活動または労働そのもの」(同ページ)のことであり、これと同格におかれている「有用労働」とは「生産物が使用価値であるということに、表わされる労働を、われわれは簡単に有用労働と呼ぶ」(同上、五六ページ)といわれている通り具体的有用労働のことであるから、結局、一定の合目的な生産活動と具体的有用労働とは同義であるということになる。現に、マルクス自身、使用価値に表わされる労働を具体的有用労働と称さずに「現実的労働」あるいは「合目的な生産活動」とストレートに表現している箇所さえ存在するのである。

「商品⁽¹⁾を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的な生産活動に、交換価値を

労働時間または同等な社会的労働に分析することは、古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である。」(『経済学批判』、国民文庫、三七ページ、傍点―頭川)

それゆえに、以上の考察からいえることは、使用価値に表わされる具体的有用労働は自然素材を獲得するための特定の合目的な生産活動、人間の筋肉・手足・脳などの諸器官の特定の生産的発揮としての現実的労働それ自体であり、抽象的人間労働はこの現実的労働としての具体的有用労働を抽象的な形態で把握したものだということである。

ところが、先に触れたように、通常この労働の二重性規定が分裂的にのみ解され、この規定に内包されたマルクスの一つの力点が無視されがちである。次の一文はその一例である。

「過去の社会において、あるいは将来の社会において、労働が一面において具体的労働であるにしても、他面においてこうした抽象的労働でなくなるような事態があったわけでも、あるわけでもない。そうしたものはおよそ労働とはいえないからである。」(見田⁽²⁾「2」九三―四ページ)

1ジ)

ここでは抽象的人間労働が歴史的範疇であるか否かを問うことが本題ではないから、その限りでこの一文の考え方を論評すると、先ず確認されることは見田氏が「具体的労働」を人間の筋肉・手足・脳髄などの生産的支出とは考えられていないということである。というのは、ここで「抽象的労働」を人間の筋肉・手足・脳髄などの個性のない支出と考え、労働が「抽象的労働でなくなるような事態」があれば「そうしたものはおよそ労働とはいえない」と見田氏が主張されているのであるから、「具体的労働」は筋肉・手足・脳などの生産的支出と無縁な定在といわれていると考えざるをえないからである。しかし、われわれはこの見解に疑問である。第一に、論理的にいつて、この理解では労働の二重性は同一労働の二重性にならないことである。というのは、二重的な労働が機械的に対立させられたままでおかつ二重的労働が同一労働の相異なる二面だとされる場合、ここでいわれる同一労働の「同一」の概念の中味は二重的な労働が労働力支出において単に同時的、平行的に行なわれるということを意味するだけで、二重的労働は労働という規定

の中で一つのものに帰着することには全然ならないからである。従って、この見解に固執しながら二重的労働を同一労働の二面と規定するのは論理矛盾である。第二に、この見解では「具体的労働」とは筋肉・手足・脳などの人間のもつ自然力の特定の発揮そのものであるという単純な事柄が見落とされているのである。換言すれば、人間の筋肉・手足・脳などの生産的支出が目的・対象・手段にがんじがらめに規定された特定の機能発揮として把握されず、あたかも無規定的に支出されるかのごとき錯覚がうかがわれる。というのは、具体的有用労働に関するこの点の理解が確定していれば、無差別一様な人間労働一般としての抽象的人間労働は種々の具体的有用労働の不等性の捨象を現実的基礎としてのみ抽出されることは見やすい道理だからである。従って、この見解の一つの陥穽は具体的有用労働のもつ具体的な有用形態にのみ一面的に眼が奪われ、それが人間労働力のそれ以外にない生産的発揮の仕方である点、つまり具体的有用労働である点を見失っている点にあることになる。換言すれば、見田氏の考え方は「具体的労働」が人間労働力の支出でない得体の知れないものに還元せしめられており、

これでは「具体的労働」が人間労働力の支出でないという不条理な帰結を生じかねないのである。従って、ここからすれば、二重的な労働を単純に区別するだけの理解の不十分性は明白である。まさしく、「現実的労働は、ある使用価値を作りだすための、特定の諸欲望にかなったある仕方、ある自然素材をわが物とするための、合目的な活動である。」(『経済学批判(一八六一—一八六三年草稿)』I、四八ページ、傍点—頭川)

以上、われわれは、本節において、使用価値に結果する具体的有用労働は特定の合目的な生産活動としての現実的労働であり、この現実的労働の抽象的形態が抽象的人間労働にほかならないということを明らかにした。

(1) 念のために論及しておけば、第二節で明確化される二重的な労働の立体的関係は既に第一節「商品の二つの要因」での価値実体としての抽象的人間労働の抽象手続きのうち包されているのである。というのは、そこで交換関係におかれた諸商品から諸使用価値が先ず捨象され、次いでこの手続きのうちに労働の具体的な有用形態もまた捨象されているとされ、最後に以上の抽象の結果として価値実体としての抽象的人間労働が析出されたのであるが、この一連の手続きを顧みると諸使用価値の捨象と同時に諸使

用価値に結実した具体的有用労働からその具体的な有用形態が捨象されることを通じて抽象的人間労働が抽出される抽象方法がここでそのまま保存されているからである。

(2) これと同一趣旨の論述は山本(5)(1)三四ページにもある。

二 労働が価値に表わされる根拠

われわれは、前節において、現実的労働は使用価値に表わされる具体的有用労働にほかならず、抽象的人間労働はこの具体的有用労働の抽象的な形態であることを明らかにしたが、これは実をいうと本節の分析のお膳立てであった。本節では、前節の考察を踏み台にして共同的生産との対比において特定の生産形態に限り「なぜ労働が価値に表わされるのか」(『資本論第一巻初版』、四一ページ、傍点—マルクス)、その必然的根拠を究明し、同時に超歴史的範疇説を支えるいくつかの根拠を批判的に吟味する。

よく知られているように、抽象的人間労働を超歴史的な範疇とみなす見解のよってたつ一つの有力な根拠は、商品生産に限らず共同的生産の場合でさえも社会的総労

働がその抽象的形態である抽象的人間労働に還元されたうえで生産諸面に均衡的に配分されえ、従って、抽象的人間労働は共同的生産にあっても社会的総労働の配分において現実的な機能を果たすがゆえに超歴史的に実存するという点にある。しかし、ここには「商品生産とは正反対の生産形態」(『資本論』I、一〇九ページ)たる共同的生産の場合に労働の現物形態つまり具体的有用労働という現実的労働がそのまま「労働の直接に社会的な形態」(同上、九一ページ)であるという一つの基本命題の把握に重大な取り違えがあり、この取り違えはより根本的には特定の生産形態においてのみ労働が価値に表わされる必然性の無理解に通じている。それゆえ、以下先ず共同的生産の場合を考察しこの関連で商品生産に限って何故に労働が価値に表わされるのかを分析しよう。

マルクスの論述をまつまでもなく、共同的生産の下では種々の個人的労働力は生産の前提をなす生産形態の共同的性格によって社会的総労働力全体の諸器官をなすものとして措定されており、個人の労働力は共同的生産という社会的有機体の内的関連にあって社会的総労働力の中に本源的に位置付けられた構成部分としてそれぞれ

が相互に一つの内的紐帯で結び合わされて存在しているのである。換言すれば、おのおのの個人の労働力がその形態で社会的総労働力全体の有機的一分をなしているがゆえに、共同的所有の生産手段の特殊な生産諸面への比例的な配分との対応関係においておのおのの個人の労働力が社会的総労働力の一器官として配分されうることになり、これによって社会的総欲望を充足せしめる諸使用価値を産出すべき社会的分業体制が均衡的に実現されるのである。それだから、個人の労働力は本来的に生産の前提をなす生産形態の共同的性格に由来して総労働力総体の社会的一器官たりうるために、ここではおのおのの個人の労働力の生産的支出、アクティブな状態にある労働の現物形態つまり特殊な使用価値に結果する具体的有用労働は個人の労働力がそうであるのと同様にしてそのまま「直接に社会化された労働」(同上、九二ページ)たりうるのである。このことは個人の労働力がここでは同時に社会的労働力として妥当することのいわば必然的な一系論にすぎないのである。ところが、ここで個人の労働力の現実的支出である具体的有用労働がその現物形態で「直接に社会化された労働」であるとは、産

出される生産物の使用価値の相違がどうであれ、おのこの生産物に必要とされる労働量が直接おのこの具体的有用労働の継続時間によって計られるということにはかならない。逆にいえば、「継続時間によって計られる、個人の労働力の支出は、ここでははじめから労働そのものの社会的規定として現われる」(同ページ、傍点—頭川)であり、共同体構成員が労働や労働生産物に対してもつ社会的関係は透明であり簡単明瞭である。従って、具体的有用労働の継続時間で各生産物に必要な労働量が直接に把握されるということは「農耕や牧畜や紡績や織布や裁縫などが、その現物形態のままで社会的な諸機能である」(同ページ)ということであり、労働の現物形態がそのまま「労働の直接に社会的な形態」だということもつまるところ生産諸部面への社会的総労働の均衡的配分の実現という共同体存続のための社会的な機能が具体的有用労働によって担われるということに帰着するのである。

ところが、これに反して、商品生産における社会的労働の形態は共同的生产の場合と正反対である。即ち、ここでは共同的生产の場合と違って個人の労働力はそれ自

体としては社会的総労働力の直接的な一成分をなしていない。従って、個人の労働力が直接に社会的労働力としての性格をもたないことに照応してその生産的支出である具体的有用労働もまたそのままでは社会的に通用する労働の形態をなしてはいないのである。それだから、具体的有用労働は共同的労働が果たす社会的機能を発揮することもないのである。このことは、言い換えると、総体として社会的分業の諸環を形成するはずの諸部面の関連は生産諸条件の私的所有によって生産が独自の営まれることに立脚して相互に分断されているということである。しかし、そうであっても、ある部面の生産物は他の部面の生産手段として充用され、この充用によって産出された生産物は更に別の部面の生産的消費の対象として投入されるように、各部面の私的な具体的有用労働は相互に独立でありながらも社会的分業の自然発生的な諸環としてラテントなかたちで素材的に依存し合っているのである。それだから、商品生産は種々の私的な具体的有用労働の相違の如何によらず共同的労働の場合とは別の形態においてそれを社会的に通用する労働として表わさねば、釣り合いのとれた社会的分業体制を自然必然

性の下に実現していくことはできないのである。

それでは、私的な具体的労働は如何にして社会的労働の独自の形態をもちうるだろうか。この点に關して最大限留意すべきは、私的形態での生産が前提されている以上、自然発生的に分割されている特殊な具体的有用労働の社会的關連が生産物交換という一点において初めて現実的につけられるということである。そうだとすれば、私的な具体的労働に独自の社会的性格もまた交換される生産物に対象化された形態でのみ表わされざるをえないことは論理必然的である。まさしく、「生産者たちは自分たちの労働生産物の交換を通じてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われる」(『資本論』I、八七ページ)のである。従って、ここからすれば、具体的有用労働は私的労働の形態にすぎないことからして、私的な具体的労働に独自の社会的労働の形態は具体的労働からその具体的な形態を捨象された無差別一様な抽象の人間労働にしかありえないことは必然的である。何故ならば、相異なる具体的諸労働の社会的妥当性は具体的諸労働のもつ不等性の捨象にのみありう

るからである。「互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にある。」(同上、八八ページ)従って、商品生産の基礎上では互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格は諸労働の人間労働一般としての同等性にあり、人間労働一般としての同等性が価値という独自の形態をとるのである。マルクスの次の論述は以上の理論的内容のコンパクトな表現とみるべきである。

「商品の『価値』は、他のすべての歴史的社会形態にも別の形態ではあるが、同様に存在するもの、すなわち労働の社会的性格を、ただ歴史的に發展した一形態で表現するだけである。」(『アドルフ・ワグナー著『経済学教科書』への傍注、マルクス・エンゲルス全集第一九卷、三七七ページ、傍点—マルクス)

それゆえに、以上の比較体制論的考察からいって、商品生産に限って労働が価値に表わされる理論的根拠は共同的生産における労働がそのまま社会的労働として社会的機能を発揮するということの理解にたつて初めて把握可能であり、両者は概念上表裏一体の關係にある。

従って、これまでの分析から以下の超歴史的範疇説批

判の論点が論理必然的に導出されるのである。

第一に、超歴史的範疇説が、共同的労働はその現物形態のまま「労働の直接に社会的な形態」たることを認めながらもかつ社会的総労働の配分における抽象的人間労働の機能を主張することは一つの背理である。繰り返していえば、共同的労働がそのまま社会的労働たるは具体的労働の継続時間が生産に要費される労働量を測る直接的な尺度となることで種々の社会的総欲望充足に必要な総労働の配分にその具体的労働が直接活用可能であり、そのまま均衡のとれた社会的分業を実現するという社会的機能を發揮するということである。これ以外に具体的労働が社会的労働と規定される所以は存在しないからである。その意味では、共同的生産において総労働の配分上の理由から抽象的人間労働の実在性を根拠付ける試みはその実具体的労働を社会的労働として規定するマルクスの一命題の根本的否定論だといわねばならないのである。従って、ここからいえることは、「価値のすべての本質的な規定」(『資本論』I、九一ページ)を含む蓄するという例のロビンソン物語に関するマルクスの主眼点もまた超歴史的範疇説の理解と正反対だということ

である。ロビンソン物語でいわれていることは、諸欲望充足のための総労働時間の配分の必要性、種々の生産物に要する労働量の具体的労働の継続時間による計測、具体的労働がここで社会的労働の形態たること、の三点であって、「自由な人々の結合体」(同上、九二ページ)の場合にも「ロビンソンの労働のすべての規定が再現する」(同ページ)と述べられている通り、このことは共同的生産のすべての形態に貫徹する法則性である。そこで、商品生産における独自の社会的労働の形態を共同的労働との対比において分析した先の考察からいって、商品価値とは共同的生産において存在した労働の社会的性格を別の形態において表現したものにすぎず、従って、先の三つの契機を含む法則性は商品生産において保存されたまま価値法則として止揚された形態で貫徹することになるのであるから、ここでロビンソン物語が「価値のすべての本質的な規定」を蔵するとは商品生産の下で価値によって担われる法則性がロビンソンの下では直接に社会的労働としての具体的労働によって担われる本源的な法則性にはかならないということの意味するのである。つまり、ここでの本旨は商品生産にあって労働が価値に表

わされることで果たされる法則性のもとと共同的生産の下で具体的労働が社会的労働として実現する法則性にはかならず、種々の生産形態につれて変化するのは経済的運動法則が実現する形態だけだということにある。従って、この点に関する超歴史的範疇説の取り違えの根源は、つき詰めていうと、共同的労働がそのまま「労働の直接に社会的な形態」たる命題理解の不明瞭性にあるというべきである。

第二に、以上の点を踏まえると、超歴史的範疇説では商品生産に限って労働が何故に価値に表わされるのかは不明に終わらざるをえないのである。というのはこうである。つまり、超歴史的範疇説の議論をつき詰めると、労働は生産形態の如何によらず抽象的人間労働としての一面をもつのであるから、労働が価値に表わされる理由はこの抽象的人間労働が商品生産では私的労働としての規定性を持ち、それゆえ社会的労働としての規定性をうることで価値に表わされると説明されることにならざるをえないのである。何故ならば、超歴史的範疇説において、商品生産の基礎上で具体的労働は私的労働にすぎず、従って、この私的な具体的労働が抽象的人間労働という独

自に社会的な労働に還元されて価値という形態をとると説明されるならば、これはわれわれの歴史的範疇説固有の見解と同じになり、それゆえに、ここでの価値は具体的労働と併存する超歴史的な抽象的人間労働と内在的關係をもたず、少なくともこの限りでは超歴史的範疇説の自己否定に墮すからである。しかし、商品生産では抽象的人間労働が差別のない形態によって社会的通用性をもつのであって、抽象的人間労働は私的労働の正反對物であり、従って、抽象的人間労働そのものが私的労働としての規定性をうることは概念的にいつてありえないことである。そして、マルクスの論述では、抽象的人間労働は商品生産に独自の形態での社会的労働そのものであり、抽象的人間労働がそれとは形態を異にする社会的労働に昇華するという論理は存在しないのである。つまり、マルクスにあっては、抽象的人間労働とは商品生産における「労働が社会的性格を受け取る場合の独特な形態」(『経済学批判』、二〇ページ)にはかならず、私的な具体的労働に独自の社会的労働の形態が抽象的人間労働であるというのが一貫した不動の理論であったのである。例えていうと、超歴史的な抽象的人間労働が商品生産に

あつて社会的労働という極印を押されることで価値に表わされるとする超歴史的範疇説のこの論法は自らが否定するローゼンベルグ流の説明、即ち「生理学的意味での人間の労働力の支出」(『資本論』I、六一ページ)を超歴史的範疇として抽象的人間労働と峻別したうえで商品生産では前者が歴史的範疇としての後者に転化するという恣意的な主張と同じであつて、この議論はローゼンベルグの説明と同じ恣意性を免れないのである。つまり、マルクスにあっては、生理学の意味での人間労働力の支出Ⅱ抽象的人間労働Ⅱ商品生産に独自の社会的労働の形態という恒等式が成り立っているのである。更にこの点に關して一歩突っ込んでいうと、超歴史的範疇説では抽象的人間労働は社会的労働に成り上がることで初めて価値に表わされると説明されるのであるから、対象化された抽象的人間労働を価値の基本的な概念規定とすることはできなくなるが、しかし、この概念規定の変更は未だ超歴史的範疇説によって唱えられていないのである。これでは致命的な論理的不徹底であらう。

以上、われわれは、本節において、共同的生産との対比において商品生産に限って労働が価値に表わされる必

然的根拠を分析し、もつて超歴史的範疇説の依拠する有力な根拠を批判的に検討した。

(1) それゆえに、商品生産では共同的生産における具体的労働Ⅱ社会的労働という一本の等式は具体的労働Ⅱ私的労働、抽象的人間労働Ⅱ社会的労働という二本の等式に分裂する。それだから、第三節「価値形態または交換価値」においてマルクスは上着の使用価値がリンネルの価値形態として存在する場合、裁縫という具体的労働が抽象的人間労働の現象形態として現われることは裁縫という私的労働が社会的労働の現象形態として現われることにほかならないといふのである(『資本論』I、七〇—三ページ)。つまり、商品生産では社会的労働は抽象的人間労働と別個にあるのではなく、抽象的人間労働そのものが商品生産に固有な社会的労働の形態なのである。

なお、マルクスは第四節「商品の呪物的性格とその秘密」において私的労働の「一つの二重な社会的性格」(同上、八七ページ)を指摘しているが、ここで一方での私的な具体的労働それ自体の社会的性格とは具体的労働が抽象的人間労働に還元される限りでは社会的に有用な形態でなければならないということである。その意味では、具体的労働それ自体潜在的な社会的労働であるが、このことは具体的労働が抽象的人間労働の素材的担い手として妥当するだけである。従つて、私的な具体的労働の「一つの二重な社会的性格」に關する議論は具体的労働Ⅱ私的労働という規定

と全然抵触しないのである。

三 価値が価値形態として現象する根拠

前節で分析したように、超歴史的範疇説が提示するその理論的根拠は必ずしも説得力をもつとはいえないが、その理論的難点は価値が価値形態となつて発現せざるをえない必然的根拠の説明においてより展開して現われるように思われる。何故ならば、価値と価値形態との内面的関連は、周知の通り、マルクスがその価値概念に立脚することで初めて決着をつけた価値論の一つの要訣であり、定立された価値概念の理論的正当性が回帰的に検証される試金石だからである。このことは古典派が価値と価値形態との内面的関連付けに失敗したことでそれがよつたつ価値概念そのものの真価が根底から問い返された事情をみてもわかる。因みに、マルクス自身、「決定的に重要なことは……価値形態は価値概念から発していることを論証すること」(『資本論第一巻初版』、三四ページ、傍点—マルクス)にあると確言しているほどである。そこで本節では、前節での分析を足掛りにして価値が価値形態となつて現象せざるをえない

究極的根拠、言い換えると価値の社会的定在たる所以を明らかにすることで超歴史的範疇説を批判的に吟味する。よく知られているように、価値形態は「価値の必然的な表現様式または現象形態」(『資本論』I、五三ページ)であるが、この「必然的な」の理論的含意についてマルクスは第三節の序文で「商品の価値対象性には一分子も自然素材ははいってない」(同上、六二ページ)ず、それ故「商品の価値対象性は純粹に社会的であるということ」を思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないということもまたおのずから明らかである」(同ページ)として価値概念の社会性によって説明しているのである。しかし、従来の価値論研究の一つの死角はこの引用文の主旨があたかも自明であるかのごとく受け取られ、価値概念の社会性の把握が等閑に付されてきたことにある。学史的にいつても古典派経済学に対するマルクスの決定的優位性の一つが価値と価値形態との内面的関係に解決を与えた点にあることはよくいわれることであるから、これは奇妙な現象形態である。そして、歴史的範疇説に関していえば、この論点の分析の欠如がかえつて超歴史的範疇説の致命的とも

(87) 価値論の一基本問題

いえる理論的難点を不問に付す結果を招来せしめてきたともいえるのである。

それでは、先の引用文にみられるように、価値が価値形態として現象せねばならない必然的な根拠、即ち価値が自然的要素を一分子も含まず純粋に社会的な定在であるとは如何に理解すればよいのであろうか。

前節で考察したように、商品生産における具体的有用労働は流動あるいは凝固の状態を問わず私的労働であり、従って、それが社会的労働となるのは生産物が交換される部面において具体的属性から抽象され人間労働一般に還元されることによってであった。そして、それ以外の素材を微塵も含まない凝固した抽象的人間労働そのものが価値という規定性を受け取るのであった。そこで、第三節序文においてマルクス一流の表現でコンパクトに価値が何故に価値形態として現出せねばならないのかが説かれて以上、第三節以前の論述において既に価値の社会的定在たる所以が論証済みであると考えるのが合理的であるが、実際、第一・二節の展開においてその所以が完全に分析済みなのであり、われわれの議論では前節の分析がこの所以を確かに内包しているのである。即ち、

商品生産では生産が私的に営まれている以上、個々の具体的労働の社会的な関連は労働生産物の交換という形態を通じてのみつけられることは既にみたことであるが、ここからして私的な具体的労働が社会的労働の独自の形態である抽象的人間労働という形態をとりうるのは私的生産者同士の生産物交換という場において対象の形態にある相異なる、具体的労働が相対することによってのみのことである。個人の労働力は初めから社会的総労働力の中で有機的な一成分として措定されておらず、従って、生産過程が私的に行なわれる限り社会的分業の諸環としての個別的な具体的労働が社会的な関連をもちうるのは交換部面においてのみのことであるから、種々の具体的労働のもつ差別性捨象の現実的基礎が交換にしかありえないのは理の当然である。ところが、価値実体をなす抽象的人間労働が交換で相対する諸生産物に体化された種々の具体的労働の差別性の捨象のうえにのみ成り立っているという点にこそ社会的定在としての価値の秘密を解く鍵がある。というのは、価値実体をなす抽象的人間労働が諸生産物に結実した種々の具体的労働の差別性の捨象の基礎上にのみ成立しているということは、抽象的人

間労働それ自体が人間の筋肉、神経、脳などの合目的な生産的支出である織布や裁縫というような具体的労働とは直接関係のない一つの社会的関連にのみ属しているということ、一つの関係概念だということだからである。つまり、リンネルや上着などの交換関係の中から抽出される織布でも裁縫でもない共通の第三者としての抽象的人間労働は、リンネル織職や裁縫師が支出した具体的有用労働という生産的活動には即自的に全然含まれていない具体的有用労働の相互関係そのものの基底に抽象的に成り立っているにすぎないのである。

「私的諸労働の社会的な形態とは、同じ労働としてのそれらの相互の関係である。つまり、千差万別のいろいろな労働の同等性は、ただそれらの不等性の捨象においてのみ存在しうるのだから、それらの社会的な形態は、人間労働一般としての、人間労働力の支出としての、それらの相互の関係である。」(『資本論第一巻初版』、三二ページ、傍点—マルクス)

従って、ここからすれば、「価値対象性は純粹に社会的である」という命題の理論的眼目はおのずから明白である。いうまでもなく、価値とは純度一〇〇%の抽象的人

間労働の結晶であるから、価値の社会的定在たる所以は抽象的人間労働そのものの存在様式に見いだす以外にないのである。それだから、価値とは抽象的人間労働の結晶であるのに商品の現物形態は具体的労働の産物にすぎず、従って、商品は別個の形態で抽象的人間労働の産物として現出すべき自然必然性を宿するのである。これこそ価値が価値形態として現象すべき必然的根拠にはかならない。⁽¹⁾それゆえに、以上の展開からいいうことは、価値の社会的定在たる所以は価値実体をなす抽象的人間労働の固有の存在様式そのものにあり、これを裏返していうと、抽象的人間労働は商品生産に固有な歴史的範疇であるという命題に帰着する。まさしく、「交換価値を生み出す労働は、労働の独特な社会的な一形態である。」(『経済学批判』、二四ページ)

ところが、従来、以上の要点に関して必ずしも明瞭でなかったために超歴史的範疇説批判の決定打を欠いたのである。そこで今度は、超歴史的範疇説による説明をきかねばならない。例えば、見田氏は早くから「価値形態は価値概念からの展開であること、ここに価値形態の展開の生命がある」(「1」一四九ページ)と主張され、価

価値形態論の扇のかなめが価値概念の理解にあり前者は後者の内的必然的な展開として初めて説明されうることを指摘された点で一つの要石をおかれたが、しかし、率直にいつて、価値と価値形態との内的関係の説明にあたって二足のわらじをはかれているように思われる。即ち、氏は、一方において、抽象的人間労働を「価値の本質」(2)二六ページとし「形態とはマルクスにとって実体の必然的な現象形態であ」(同上、四四ページ)り、「価値の実体なしに、したがって価値概念もなしには、価値形態の展開はおろか一つひとつの形態の把握さえも不可能であろう」(同上、一〇〇ページ)とされ、ある論文では「価値の実体と価値形態の関係」(4)三二ページ)という表題をもつ一節さえ設け、この限りでは「価値の形態は、その実体を明らかにしうるに先きだつて解明しうる」(7)一九〇ページ)と豪語される宇野氏の立論をきわめて正当な見地から批判されたが、しかし、他方で、抽象的人間労働Ⅱ超歴史的範疇説を主張される箇所では「個々人の労働は抽象的労働として他の個人の労働と同質、同等のものであり、一定の割合ではたがい等に等置され、交換しうるものだ、という点ではじめ

て、その個人労働の社会性が保証される」(1)八六ページ)と述べられるのである。しかし、この説明からは「商品価値が自然的なものでなく社会的なものである」(同上、一五三ページ)まさにその理由が容易に捕捉しがたいのである。それもそのはずである。氏によれば、『資本論』では「単純な総合過程」(同上、一一六ページ)によって「価値概念そのものが、その要素である抽象的労働と社会的労働から総合され、確定される」(同上、五八ページ)と理解され、マルクスは「抽象的労働に社会的労働という規定を与え、そうした社会的労働の意味をもつ抽象的労働の対象化したものとして、価値の概念に到達する」(同上、九四―九五ページ)と主張されるのである。この場合、氏によれば、抽象的労働とは人間労働のもつ超歴史的な一面であり、社会的労働とは抽象的労働が商品生産において受け取る歴史的規定性であり、この主張自体、前節の考察からいつて首肯しがたいが、ここで重要なことは「抽象的労働そのもの、社会的労働そのものにとつては、価値という形態をとることはどうでもよいことであつて、それら自身のうちには価値にまで上昇する必然性はすこしもない」(同上、二七ページ)

と述べられている点であり、これが価値概念理解に流れる氏の一貫した思想だということである。つまり、氏の理解では、「価値の要素としての抽象的労働も社会的労働も、いわば超歴史的なものであり、また前者は生理学的なものにすぎない」(同ページ)のであるから、純社会的定在としての価値とはそもそも最もプリミティブに規定すれば何であるかには明確にこたえられていないのである。しかし、価値の基本的な概念規定は物質化された抽象的人間労働という定義以外にないのであるから、価値の社会的性格もまた抽象的人間労働の存在様式に求めざるをえないのである。実際、氏は、価値と価値形態との関係についての説明の段になると「この分析(価値形態の：頭川)のうちでは、最初の価値の分析、その実体が社会的なものであることの発見、これが決定的な意義をもっている」(同上、一五七ページ)と主張されて無意識的にマルクスの見地に戻らざるをえなくなっているのである。従って、氏は一方で価値概念の社会性の説明に際して歴史的範疇説を、他方では超歴史的範疇説を、といたように二本の刀をそれぞれ使い分けられているのであるが、しかし、両者は二律背反の関係にあって両立

ないし折衷は不可能である。ここに超歴史的範疇説の致命的難点がはしなくも露呈しているというべきである。

以上、われわれは、本節において、前節での分析を踏み台にして価値の社会的定在たる所以を考察し、その反面で超歴史的範疇説を批判したのである。

(1) いうまでもなく、第三節「価値形態または交換価値」の課題は価値という社会的定在がその正反對物たる使用価値という自然的定在でもって転倒的に現出する摩訶不思議さに着目して価値と価値形態との間に伏在する内面的な連繫をえぐりだすことにあるが、従来の通説的理解には価値と価値形態との内面的関係把握について根本的な理論的混乱が実在する。この点については別稿において本格的に分析するつもりである。

四 『経済学批判要綱』における「序説」の理解

われわれはこれまでの展開において抽象的人間労働と価値概念との内面的関連を追及しこれでもって抽象的人間労働の歴史的 성격に関する理論的な論点をすべて究明したが、これとは別個に、従来の超歴史的範疇説には看過しえない解釈上の問題点が内蔵されていると思われる。それは『経済学批判要綱』の「序説」の文言の理解につ

いてであり、超歴史的範疇説の解釈には基本的な誤解があると考えられ、最後にこの点に立ち入って説明を加えておくことはきわめて有益である。そこで本節では抽象的人間労働Ⅱ歴史的範疇説の最終的詰めとして「序説」の文言のモチーフを明らかにする。

よく知られているように、マルクスは「序説」の「3) 経済学の方法」で「労働一般」について言及して先ず次のように述べる。

「労働は一つのまったく単純な範疇のように見える。この一般性での—労働一般として—その表象もまたきわめて古いものである。それにもかかわらず、経済学上この単純性で把握された『労働』は、この単純な抽象をつくりだす諸関係と同様に近代的な一範疇である。」

(『経済学批判要綱』Ⅰ、二四ページ)

そして、この事情を学史的に回顧して重金主義、重商主義、重農主義による富を創造する労働の限定された理解を簡単に跡づけ、「富を生む活動のすべての規定性をすてさったのは、アダム・スミスの巨大な進歩であった」(同ページ)としてスミスに至って初めて「マニファクチュア労働でもなければ商業労働でもなく、また農業労働

でもないが、しかしそのどれでもある労働一般」(同ページ)が指定されえたことを述べ、この学史的展開の背後に潜む事情を掘り下げてマルクスはおおむね次のようにいう。即ち、スミスによってなしとげられた「労働一般」の指定という「巨大な進歩」は「これだけでは、人間が—どんな社会形態であろうと—生産するものとして登場するもつとも単純でもつとも古い関係にとつて、抽象的表現が見いだされたにすぎないかのように見える」(同上、二四—五ページ)が、「これは一面からみれば正しい」(同上、二五ページ)にせよ、やはり「他の面からみれば正しくない」(同ページ)のである。その理由の第一は「労働一般」の把握は「どんな種類の労働もはやすべてを支配する労働ではなくなっている、きわめて発展した現実の労働諸種類の総体を前提としている」(同ページ)からであり、第二に、「労働一般」の抽象は特定の使用価値に結びつく労働種類に対する無関心を前提し、この無関心は個人が一つの労働から他の労働に容易に移動しうる労働の自由な可動性を現実的基礎としているからである。従って、その意味ではこの「労働一般」という、「すべての社会形態に妥当するきわめて古い関

係を表現するもっとも単純な抽象は、じつにこの抽象の形では、もっとも近代的な社会の範疇としてこそ実際のうえて真実なものとなって現れる」(同ページ)のである。かくて、マルクスは「労働一般」に関する以上の論述を次の一文で結ぶのである。

「労働のこの例が適切にしめすことは、もっとも抽象的な諸範疇でさえも――はかならぬその抽象のゆえに――すべての時代にたいして妥当するにもかかわらず、しかもこの当の抽象という規定性の点では、やはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物であるということ、そしてその完全な妥当性は、ただこれらの諸関係にたいしてだけ、これらの諸関係の内部でだけということである。」(同ページ)

そこで、例えば見田氏は先ず「労働一般」を抽象の人間労働ととり、この「もっとも抽象的な」範疇はマルクス自身によって「すべての時代にたいして妥当する」と主張されていると解し、ここでの主旨は「労働一般」が「すべての時代にたいして妥当する」にもかかわらず近代社会の「現実そのものが、対象そのものが、労働一般をむき出しにし、いわば対象そのものが労働一般を抽象

する」(「1」九〇ページ)という点にあり、「マルクスが、近代的というのは、『労働』の論理的な内容あるいは位置のことではなく、その発見の時期およびそれが社会の表面に顕現する時期について言っている」(同上、九一ページ)と主張される。しかし、この解釈は氏にふさわしくないと思う。最大の問題点はここでの「労働一般」を抽象の人間労働に等置されている点であり、この等置は理解できない。というのは、ここでのマルクスの議論が次の単純な事柄だからである。即ち、学史を顧みると重商主義にあっては金銀をもたらず特殊な現実的労働だけが価値を生みだす労働と規定され、重農主義の場合には「労働のある一つの定まった形態――農業――を富を創造する労働として措定し、また客体そのものをものは貨幣という仮装でなく、生産物一般として、労働の一般的結果として把握」(『経済学批判要綱』I、二四ページ)する点で一つの進歩を示したが、現実的労働そのものは未だ農業労働という狭い限定を受けていたのである。これに対して、スミスの場合には社会的分業の進展という経済的背景に規定されて重商主義の貨幣的外被と重農主義の現物的制約から解放され、使用価値を生みだす労働

の区別には無頓着に有用な物さえ生産する労働はすべて価値をつくりだすという価値形成労働の一般化を遂行したのである。「農業、製造工業、海運業、商業等々のような現実的労働の特殊な諸形態を、つぎつぎに富の真の源泉であると主張してから、アダム・スミスは、労働一般が、しかもその社会的総姿態での、分業としての労働一般が、素材的富つまり諸使用価値の唯一の源泉であると宣言した。」(『経済学批判』、四四ページ、傍点—マルクス)つまり、マルクスは、ここで、価値形成労働が社会的分業の諸環を担当する総体としての現実的諸労働におし広げられるに至る発展過程を学史上如何に苦難の道程をへて達成されたかを商品生産が社会的分業全体をとらえる過程との関連で跡づけているのであって、このことは「労働一般」が抽象的人間労働を意味するものではない。換言すれば、スミスは「現実的労働から交換価値を生みだす労働、すなわちブルジョア的労働の基本形態への移行を分業によってなしとげようと試み」(『経済学批判』、四五ページ、傍点—マルクス)たにすぎず、価値創造の観点から無意識的にすべての具体的労働の無差別性を主張しただけで、このようなすべての労働の単純

な無差別性が実は千差万別の具体的諸労働の不等性の捨象の基底においてのみ実存するという理解を欠き、それがために抽象的人間労働を具体的労働から概念的に峻別して析出することにもろくも失敗したのである。⁽¹⁾従って、特殊な諸使用価値をつくる諸労働はその具体的形態の如何によらず価値形成的であると認識し社会的分業となつて現われる具体的諸労働の相違を取り払うことは、具体的諸労働をその抽象的形態である人間労働に還元することと本質的に違っていることである。そうであるからこそ、社会的分業の諸環を担う総体としての「労働一般」は「すべての時代にたいして妥当する」にもかかわらず、「この当の抽象という規定性の点では、やはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物である」というのである。従って、この場合「近代的な一範疇」だというのは確かにその限りでは「その発見の時期およびそれが社会の表面に顕現する時期について」であるが、それは抽象的人間労働についていわれているのでは全然なく「社会的総姿態での、分業としての労働一般」が価値形成的であるということの認識に関してであり、見田氏の理解とは正反對である。しかも、この場合「労働一般」は抽象的人間労働

働であるとすれば、スミスは商品に表わされる労働の二重性を発見していたということになるが、これまた、マルクスのスミス評価とは正反對の結果を引き出すことになる。マルクスによれば「商品に含まれている労働の二面的な性質は、私をはじめ批判的に指摘したものであ」(『資本論』I、五六ページ)り、「古典派経済学は……どこでも明文と明瞭な意識とをもっては区別していない」(同上、九六ページ)のであるが、ことスミスに關しても両者の概念的な混同についての批判的な指摘は次の通り明瞭であった。

「スミスは、価値をつくるものであり労働力の支出であるかぎりでの労働と、使用価値をつくるものであり有用な合目的な形態で支出されるかぎりでの労働とを混同している。」(『資本論』II、三八三ページ)

従って、ここからすれば、「労働一般」が抽象的人間労働を表わすとなると、マルクスは労働の二重性に関して相容れない対極的なスミス評価を下しているということになり、マルクスの首尾一貫しない思考が責めを負うことになる。なお、この点と関連して是非触れておくべきは、古典派の労働の二重性把握について見田氏が過大

評価あるいは誤解されているのではないかと思われるふしがあることである。そして、このことが「労働一般」
 II 抽象的人間労働なる図式の最深の基礎たりえていると思われることである。その端的な例証は次の一文である。

「古典派経済学者は、抽象的労働を具体的労働からは完全に分離することに成功した。」(2) 四〇ページ

しかし、マルクスが古典派の完成者であるリカードの場合でさえ「使用価値に表わされるかぎりでの労働と交換価値に表わされるかぎりでの労働との混同が一貫して見られる」(『剰余価値学説史』II、一三六ページ)と確言していることからしても、見田氏の一文はマルクスによる評価と背馳しており、見田氏にあってはこの一文にみられる理解と前述の「労働一般」II 抽象的人間労働という理解が背後で直結していることは想像にかたくない。以上、われわれは、本節において、超歴史的範疇説に最後の補強材料を与えているかにみえる「序説」の文言を検討し、それが取り違えのうえに成立していることを明らかにした。

(1) ついでに言及しておけば、スミス、リカードを理論的頂点とする古典派にとっての労働の二重性把握の欠如は実

は根が深い。というのは、古典派にとって商品生産は永久的な生産の自然形態であり、それゆえに、具体的労働は直接社会的労働の形態であって、もともと労働が何故に商品生産に限って価値に表わされるのかという問題意識すら存在しなかったからである。この点の詳細については別の機会に論じる予定である。

(2) 見田氏のこれと同じ論述は(2)三三ページにも存在する。

むすび

われわれは、本稿のこれまでの展開において、先ず抽象的人間労働が具体的有用労働を抽象的な形態で把握したものであるということを明らかにし(第一節)、そのうえで商品生産に限って労働が価値に表わされる必然的根拠を説くことで抽象的人間労働の歴史性を主張し(第二節)、更にこの分析内容をステップにして価値の社会的存在たる所以が抽象的人間労働の独特な存在様式にあることを究明し(第三節)、最後に『経済学批判要綱』の「序説」の問題の文言を吟味し、もって全体として抽象的人間労働の歴史的範疇説を構築したのである。

ここで振り返っていいうことは、資本主義的生産の

体系的把握の根本的基礎が価値概念にあるとすれば、価値概念の把握の要諦は抽象的人間労働の独特の存在様式の把握にあり、その意味で労働の二重性把握は「経済学の理解にとっての決定的な跳躍点」だということである。従って、歴史的範疇としての抽象的人間労働は価値概念の生命にほかならない。これが以上の分析を通じてえられる本稿の結論である。

参考文献

- [1] 見田石介『資本論の方法』弘文堂、一九六三年。
- [2] 見田石介『「資本論」における実体と形態』『見田石介著作集』第三巻、大月書店、一九七六年所収。
- [3] 見田石介「論理Ⅱ歴史説とマルクスの方法」『見田石介著作集』第三巻所収。
- [4] 見田石介「価値の実体と価値形態」『価値および生産価格の研究』、新日本出版社、一九七二年所収。
- [5] 山本二三九「人間の労働の経済学的考察」(1)・(5)、『立教経済学研究』第一四巻第四号・第一六巻第二号、一九六一年・六二年。
- [6] 宇野弘蔵『経済原論』『宇野弘蔵著作集』第一巻、岩波書店、一九七三年。
- [7] 荒又重雄「抽象的人間労働と社会的労働」『北大経済学研究』第二二巻第三号、一九七二年。

- [8] 吉原泰助「労働の二重性」『マルクス経済学体系』I、有斐閣、一九六六年所収。
- [9] ローゼンベルグ『資本論註解』第一巻、開成社、直井武夫訳。
- [10] 正木八郎「商品論と抽象的人間労働」『現代思想』第

三巻第一三号、一九七五年。

[11] 『経済学の根本問題』共生閣、一九二九年。

(高知大学専任講師)